

## 「おすそ分け」から始まるコミュニティ

同志社大学社会学部 教授 立木茂雄

大きな夏みかんがふたつ、目の前で鮮やかなオレンジ色を見せてくれている。これは、数日前、息子が自宅マンションのエレベーターで乗り合わせたご近所の夫婦からいただいた「おすそ分け」だ。

私が暮らすマンションは人工島に作られた新興住宅地にある。住民はもちろん島の外から転入してきており、ご近所同士、あいさつは交わすものの、いわゆる昔ながらの緊密な付き合いは希薄な地域だ。それだけに、自治会は、住民が参加できるさまざまなイベントを季節ごとに企画するなど、コミュニティづくりに力を入れている。

近年、改めて「コミュニティ」という言葉が注目を集めている。そもそも、戦後、最初にコミュニティが注目されたのは70年代にさかのぼる。60年代の高度経済成長にともなう産業構造の変化や、都市化による地域共同体の崩壊を受け、69年に国民生活審議会が「コミュニティ生活の場における人間性の回復」を発表した。

都市に多くの人が集中し、近所に見ず知らずの人同士が暮らす地域。さらに、勤め人は、一日の大半を会社で過ごし、生活の場である地域に目を向けることには消極的であった。そこで、自発的な人々のつながりであ

るコミュニティを形成することで、人間性の回復を地域に求めようという狙いがあった。

行政は、共同で利用できる公共施設を整備してほしい、との地域の新住民のニーズに合わせて、公園やコミュニティセンターなどのハコモノの整備を進めた。しかし、コミュニティ施設の利用者は、高齢者や婦人会など特定の住民に限られていったのが現実だった。その後、行政用語から「コミュニティ」は姿を消し、「小地域」「近隣住区」「コンパクトタウン」などの表現が使われるようになった。

しかし、07年2月に総務省が、コミュニティをとりまく環境の変化に対応しながら、今の時代に即した地域自治のあり方や、活動方法を検討することを目的とした「コミュニティ研究会」を発足させるなど、再びコミュニティという言葉が取り上げられ始めた。08年11月には、災害時の高齢者支援や、防犯などの分野でもコミュニティのあり方に関する検討会が総務省消防庁でも始まった。

その背景には、ここ数年、全国で行われた大規模な市町村合併がある。地方自治体の数が、従来の半分以上に減少した分、その行

政区域は格段に広がった。それまで、町村役場では、住民との距離の近さを活かし、きめの細かい行政サービスを提供することができた。しかし、合併により、住民との距離が遠くなり、生活をよりよくするためには、中間にクッションとなるような組織を置かなければ、成り立たなくなる状態が日本各地で発生してきた。

そこで、例えば小学校区単位で地域の代表者が集まり地域の課題については住民自らが解決策を協議し、首長に提言できる「地域自治区制度」等が作られた。このことからわかるように、住民に自治事務を担ってもらおうというのは、一つの大きな流れになっている。自治体が地域の力に期待しているのだ。

しかし、都市部の住民は、依然として公共に関わることは、役所の仕事だとの意識を強く持っている。また、自分の周囲で暮らす人と関わるのはわずらわしいとの気持ちを持つ人も多い。仕事を持つ女性も増えて、地域の担い手は、退職後の高齢者らが中心になっているのが現状だ。しかし、実は、コミュニティづくりは、そんなに面倒なことではないと私は考える。

神戸市の北西部にある北須磨団地では、およそ四十年も前から自治会が、時々住民のニーズに応じて各種法人を設立し、自前でサービスをまかなってきた。幼保一元化に始まり、最近では在宅介護支援センター、特別養護老人ホーム、知的障害者更生施設などを経営している。この活動を根底で支えているのが、「あいさつ運動」だ。

この地域では、まちを歩いていると大人たちが下校途中の小学生に「おかえり」と声

をかける。子どもたちは「ただいま」と返す。最近では、ハイタッチで応える子どもも多いという。

この団地は、初期のニュータウンだが、今でも子供世代が戻ってきていて、オールドタウン化していない。子どもたちは地域で見守られており、放火や空き巣などの犯罪も少ない。日常的なご近所とのあいさつやおすそ分け、立ち話などの行動が、いかにコミュニティをつくるときの核になるかが、極めて分かりやすく立証されている。

構造改革や町村合併など大きな仕組みの変化の中で、結局、安全や安心を守るのは、地域の力であることがより強く浮かび上がってきた。緊急時の救出、救命活動は、コミュニティの力にかかっているという事実は、阪神淡路大震災以後、さまざまな災害で教訓として残されている。自主防災組織が、災害時の要援護者を把握するなど、防災に重点をおいたコミュニティづくりも始まっている。

コミュニティづくりと構えると大げさだが、ほんの小さな一歩を踏み出すことで、きっかけを作ることが出来る。そこで、北須磨団地のあいさつ運動で教えてもらったあいさつのコツをご紹介します。「あ(明るく)」「い(いつも)」「さ(さきに自分から)」「つ(続ける)」この「あいさつ」を心がけることで、地域の中で自然とあいさつが広がっていくという。

神戸市で行った別の調査では、5軒以上、おすそ分けをしている人が多く住む地域は、コミュニティ活動が活発だった。ご近所づきあいは、テニスの板打ちと同じで、やわらかいボールを打てば、やわらかいボールが

返ってくる。ならば、まずは自分からやわらかいボールを打てばよい。あいさつやおすそ分けなど、ご近所とのおつきあいに一歩踏み出すことが、誰もが安心して暮らせる

安全なコミュニティづくりに、やがてはつながるのだ。

息子がいただいたさわやかな夏みかんの香りは、お隣さんとのゆるやかなつながりを実感させてもくれている。